

令和元年6月11日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04444

研究課題名(和文)近代における教育統治論と能力言説の生成に関する歴史研究

研究課題名(英文)Historical study on the discourse system of Education, Government and Faculties

研究代表者

白水 浩信 (SHIROZU, Hironobu)

北海道大学・教育学研究院・准教授

研究者番号：90322198

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は近代統治論における教育言説の生成に関する歴史研究であり、能力の束として人間を捉え、統治することが近代教育言説を打ち立てるに至ったことを具体的な文献史料に即して明らかにすることを目的とする。まず16世紀の統治論では人間の能力を統治しようとする萌芽を見出すことができ、向後、18世紀には顕著な能力統治論として教育言説を編成するに至る。その際、機能本位の有機体モデルを生物学から借用し、能力を実体として表象し、これを開発することを使命とする教育言説を生成した。19世紀には education の語源を「引き出す(educere)」に求めるに至り、現代まで継承される謬説を生じた歴史的過程が解明された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日、教育はその費用対効果を追及するマネジメント論を核心に据える新自由主義に席卷されており、教育効果を能力を通して可視化する技術として現出している。しかし能力の認識論的吟味を欠き、個人に矮小化する教育効果論は、学びの共生空間である学校を掘り崩す危険な統治化の全面展開の局面として捉えられる。人間を統治する技術の総体はいかにしてその合理性を獲得し、どのような戦略でもってその能力を実体化し、教育効果として測定可能にしてきたのだろうか。本研究は人間を能力の束として把握・測定の対象とし、操作可能にした歴史を振り返ることによって、新自由主義に席卷された教育言説を批判する新たな視座を切り拓くものである。

研究成果の概要(英文)：This study is historical analysis on the educational discourse since the 16th century in the Western. Through the critical documentation, it is the purpose of the study to investigate the historical process of the formation of educational discourse in which human being is represented as bundle of mental faculties, and in which educational mission is grounded on developing character and mental faculties. First, the sign and inclination of governing human faculties was indicated in the 16th century. Second, the educational discourse was formed as governmental theory and technology of faculties in the 18th century. Third, while the educational discourse borrowed the organism model of 18th century biology, it became possible and mission to develop children's faculties by education. Finally, in the 19th century, the etymological origin of education was modified to drawing out (educere), this misleading is transmitted today's educational discourse.

研究分野：教育学

キーワード：教育言説 educationの語源 能力 統治論 有機体論

1. 研究開始当初の背景

2000年代前後から、わが国の教育と政治をめぐる言説状況の中で、新自由主義との関係が陰に陽に問われてきた。そうした状況の下、2004年に本研究代表者はミシェル・フーコーの統治性論(gouvernementalité)に触発されて、18世紀を中心とした近代ポリス論分析を博士論文として、また著書として上梓した(『ポリスとしての教育』2004)。その反応はと言えば、過剰な統治、市民社会への介入を問題視してきた福祉国家批判であると単純化され、新自由主義を助長するものであるかのような論評さえ見受けられたのは遺憾であった。しかしその後10年、雌伏して政治動向、研究動向を熟視するも、新自由主義を推進する政治家、行政官僚がフーコーの統治性論を援用して学校教育の現状を批判した試しもなかった。むしろ戦後の民主的教育体制は費用対効果を追及するマネジメント論に曝され、教育効果とそれを可視化する尺度(エビデンス)の開発に勤しむ、むしろ新自由主義に貢献する研究の爆発的流行を前に、教育学は新たな批判・対抗軸を見失っていった観さえある。この秋こそ新自由主義の名のもとに進行している現状を憂い、学びの共生空間である学校、ひいては相互扶助と連帯の社会空間そのものをも掘り崩す危険な統治化の全面展開の局面として捉え直し(A. Touraine, *La fin des sociétés*, 2013; J. Julliard, *L'École est finie*, 2015)、「自由」とは経済的合理性の別名に過ぎず、ガバナンスを唱える合理性とは経営至上主義言説であることを正面切って批判すべき時のように思われる。はたして「統治」はいかにして人間とその組織を導く「合理性」を手にし、どのような戦略でもってその対象を浮かび上げさせ、効果を測定することができるようになったのだろうか。ひとえにそれは、人間をその機能とその潜在相たる能力の束として把握・測定の対象とし、操作可能にした歴史を振り返ることによって明らかにされる研究課題である。

研究代表者は、18世紀から19世紀にかけて、フランス及びドイツ官房学において、人間を教育によって導くことがポリスの最も重要な対象領域の一つとして確立していた点を明らかにしてきた(「教育・福祉・統治性 能力言説から養生へ」『教育学研究』2011年等)。くわえて内政実務全般を扱ったポリス(戦前日本の場合は内務省)は、文字通りパターナリスティックな国家=親、臣民=子という家族国家的視座によって貫徹されていることも明らかにしてきた。すでにその点はヘーゲル『法哲学綱要』において、市民社会の一員になることは社会の養子となることにほかならず(「ヘーゲル『法哲学綱要』における教育 「市民社会の息子」とポリツァイ」神戸大学発達科学部教育科学論講座『教育科学論集』2002年)、日本の警察(ポリス)制度の礎を築いた川路利良もまた頑迷な民衆の子守りを以て警察の心得としている通りである(「ポリス論の受容と教育的統治の生成 後藤新平『國家衛生原理』を中心に」神戸大学発達科学部『研究紀要』2000年)。さらにポリスが扱う領域が主に治安、救済、衛生、教育の四領域であり、今日の行政機構上は区別されているわけであるが、実はこれらの行政実務領域が一体のものとして統治されていたこと、視座と戦略が共有され、さらには対象さえもが重なり合っていることも指摘しておいた(「18世紀フランスにおけるポリスと教育 N・ドラマールとその周辺」『教育学研究』1998年等)。「統治」とは何かをその歴史を遡って研究しようとするれば、これらのことが十分具体的な史料分析に基づいて明らかにされてきたことは前提とされねばならず、研究代表者はその意味で本研究課題を遂行し、進展させていく責務があると考えた。研究協力者の平野亮もまた、人間を能力の束として表象・操作する能力心理学、とりわけ骨相学について本邦ではじめて本格的な研究を達成した新進気鋭の若手研究者である(『骨相学と教育 能力人間学のアルケオロジー』2015年)。本研究は、人間をマクロに把握し、社会物理学(social physics)を立ち上げた統治論と人間をミクロに解析する能力の分析論とがいかにして接合してきたのかについて歴史的探究を展開することを企図するものである。

2. 研究の目的

教育学研究における近年の動向は、教育と政治の再結合へと向かっているように思われる。とはいえ、今日、政治そのものが社会的領域の統治でしかありえないなかで(アレント『人間の条件』)、近代教育もまた統治の一環として立ち上がってきたことを看過するならば、無自覚なままに教育の統治性(人を導くことの権力性)を強化し、人間はますます厳しい能力管理に把握されていくだろう。本研究はむしろ教育の統治性に自覚的であるべく遂行されるという特色を堅持するものである。またとりわけ本研究が独創的である点は、18世紀末の有機体論に導かれた能力言説と統治論の接合過程として把握しようとする点にある。そのことがまた education とは何か、その原義、原像を見直す根源的な契機となり、教育学研究としての顕著な意義を有するに違いない。

そこで本研究は近代統治論における教育言説の立ち現れ方に関して基礎的歴史研究を行おうとするものである。特に近代以降顕著になる 能力 の束として人間を表象することと、その統治=導きのあり方がどのような形で結びつき近代教育言説を打ち立てるに至るのか、そのことを具体的な文献史料に即して明らかにすることが目的である。特に本研究では以下の(1)~(4)の具体的研究課題を解明することを目指すことにする。

(1) 西洋統治論の分類・整理による目録化

まず16世紀以降の様々な統治論(家族、子ども、国家等)をリストアップすることを目指す。16世紀以降の様々な統治論(教会、家、子ども等 最後に現れるのが国家)を大英図書館(BL)、フランス国立図書館(BNF)をはじめとした各国図書館の蔵書カタログからリストアップする。その際、書誌情報、著者情報とともに、題目から分かる主題(誰が何をどのように

統治するのかが等)についても整理する。この基礎作業をもとに次項以下の実際の文献入手とその読解・分析が進められる。

(2) 西洋統治論における能力言説の現れ方に関する読解・分析

いつ、いかにして、人間の能力が統治の客体として認識されるに至るのかに関して検討する。19世紀になるとジェームズ・ミル『教育論』は教育(education)を社会に有益な精神的能力を引き出すことだと述べるに至る。こうしたイギリス功利主義の影響を受けて、福沢諭吉もまた能力を引き出すことこそ教育の本義であり、むしろ発育(education)と訳すべきであったと書き付けている(「文明教育論」)。こうした能力言説全盛の時代を前にしながら、ニーチェはカントが認識能力(純粋理性)及び道徳的能力(実践理性)を発見したと勘違いしていたと述べ、当時の人々が「新しい能力」探しに躍起になっていたと揶揄し、結局、カントをはじめ時流に乗ろうとした学者が「能力が可能にする(vermöge eines Vermögens)」というトートロジーに陥ったと指摘する(『善悪の彼岸』)。いつから能力は人間存在を規定しうる概念にまで上昇したのか。そのことが統治論においてはどのような現れ方を示すのかについて読解・分析を試みる。

(3) 西洋統治論における生物学(有機体論)の影響

能力統治言説における機能主義的生物学(有機体論)の影響を確認する。統治論の読解・分析にあたって、18世紀末に登場する機能(function)本位の生物学、有機体論(organism)の影響がどの程度あったのかを確認していく。人間本性(nature)を様々な機能によって把握するようになったことは、人間を客体とし、その行為を導くことを旨とする統治論にとっては決定的に重要な歴史的契機となったと推定される。その証左として、フランス革命期の医師であり政治家でもあったカバニスは『人間の身体と精神の関係』(1802)において能力をいかに改良するかについて唱え、コンドルセ『人間精神進歩史』(1795)の冒頭でもやはり人間の能力の発達と進歩について議論がなされている。18世紀末から19世紀にかけて、脳を精神的機能に分割して可視化した骨相学がそうであったように、能力(faculty)は人間本性の万能の表象体系として歓迎され、教育と統治の目的をその発達・開発(development)であるとする思考システムが成立したのではないかという仮説の検証が必要がある。現代人をも捉えて離さない能力言説の出現と由来の歴史的解明を統治論と生物学の接点に求め、当時、往々にしてありえた自然科学者にして統治論者であった者たちの言説を読解・分析する。

(4) 「education = 能力を引き出すこと」という俗説の由来

(1)~(3)の作業の成果を受け「education = 能力を引き出すこと」とする俗説の由来を検証する。これまで研究代表者は、古典ラテン語の用法にまで遡り、名詞 educatio と動詞 educare の原義を明らかにすることに従事してきた。従来、educare と educere (外に連れ出す)との違いは明確ではなかったと言われてきたが、4世紀前後に著された文法書、語彙解説などは明確に両者の違いを認識しており、古典ラテン語の世界ではこうした初歩的な混同はなく経過したと思われる。つまり educare は栄養(特に母乳)を与えて養い、大きく育てることであって(bringing up)、educere と区別されていたわけである。しかし16世紀頃から各国語に移植される educatio は、次第に統治論と結びついた新たな教育思想のなかで屈折し、「education = 能力を引き出すこと」という俗説へと神話化したのではないだろうか。このような変化は徐々に生じたものなのか、決定的な転形期があったのか、あるとすればどのような史料において確認されるのか、可能な限り特定していくことをめざす。

3. 研究の方法

統治論における教育言説の現れ方を検討する本研究は、上記の四つの具体的作業課題に分節化され遂行された。(1)西洋統治論の分類・整理による目録化、(2)西洋統治論における能力の現れ方に関する読解・分析、(3)西洋統治論における生物学(有機体論)の影響、(4)「education = 能力を引き出すこと」という俗説の由来。(1)及び(2)の作業は本研究の基礎的作業と位置づけ、先行的かつ継続的に遂行された。特に本研究の独創的な点である(3)統治論と生物学、特に機能本位の有機体論の影響に関しては、研究協力者とともに史料群の分析を遂行した。有機体論の中から生じた能力観が認識論的吟味も限定も欠いたまま人間の本性の分析とその教育に拡大移植されたとき、education は能力を引き出す営みだという俗説を強化していくのではないかという点に関して検討した。

まずは16世紀~18世紀にかけての統治論をリストアップした。その作業と同時並行させながら、適宜、具体的内容の検討が必要であると思われ、かつ国内でも入手可能な文献について、読解分析を開始した。

(1) 西洋統治論の分類・整理による目録化

統治論の目録化の緒にあつて、二つの方向で作業は展開される。

大英図書館(BL)、フランス国立図書館(BNF)のオンライン・カタログにアクセスしながら、government, gouvernement, Regierung等をタイトルに冠する文献を検索した。その際、著者情報及び書誌情報に関してもデータベース上に整理し、特に子どもや国民(臣民)の統治、国家統治に関連しそうな文献については、読解・分作業を円滑に行うため予めチェックした。

当然、膨大な件数にのぼるものと予想されるので、少し古い文献目録ではあるが、von Magdalene Humpert, *Bibliographie der Kameralwissenschaften*, Kurt Schröder, 1937をも参考に

しながら、読解・分析作業の対象を絞り込むことにした。この目録は主題ごとに配列してあるため、本研究にとっても有用であった。

(2) 西洋統治論における能力の現れ方に関する読解・分析

作業(1)で得られたリストをもとに、子どもの統治、家族の統治、臣民の統治といった特徴のある文献について、国内から海外へと調査範囲を広げながら入手可能なものを中心に分析・読解を進めた。国内で入手困難な文献については、海外資料調査を実施した(平成29年度)。効率よく閲覧・複写ができるように、所蔵先リストを精査し、極力短期間で集中して資料調査が可能ないように工夫した。読解に関しては、次の観点に留意した。

統治論において能力(faculty) 関連語彙がどのような文脈で、どのような語とともに用いられているか。

能力はどのような性格のものか。漠然とした有用性、器用さにとどまるのか、あるいは知性、道徳性といったものに及ぶのか、さらにはより細かく分析されているのか。

能力を導き、発達させることができるかと述べているのか。あるいは統治者の使命は変わらず能力を見出すだけにとどまるのか。

能力は人間を導くにあたって、すなわち人間を統治するにあたってどのような特徴、役割を与えられているか。特に国家統治論の場合、個々人の能力は国力といかなる関係にあると考えられていたか。

(3) 西洋統治論における生物学(有機体論)の影響

統治論における機能主義、すなわち有機体論(organism)の影響を検討した。作業(1)及び作業(2)で得られた結果をもとに、次のような特色のある統治論をピックアップし、統治論における人間及びその集合体である社会ないし国家がどのように想念されているか検討した。

なお本作業に関しては、研究協力者の平野亮との共同作業を実施し、次の観点から収集した文献の検討を進めた。

生物学者、生理学者、医師が直接著した統治論。特に生体の機能によって能力を定義し、そのアナロジーによって個々の人間の生活、社会体を説明し、統治しようとするもの。有機体論の影響下に、人間の能力をその社会的機能にそって細分化し、統治しようとするもの。

社会体全体の機能と能力を有機体アナロジーによって把握しようとするもの。特に人口統計でもって社会の機能を分析し、出生 - 死亡、婚姻 - 離婚、犯罪 - 道徳といった二元的構図でもって機能不全に陥っている社会像を提示するもの。

(4) 「education = 能力を引き出すこと」という俗説の由来

作業(2)の読解・分析と同時並行で、educationの語源に関する俗説への言及の有無を確認していった。作業(2)の能力の読解・分析と並行して、educationの語源に関する俗説の有無を確認していく。適宜、古い辞書類(OED、Littre、Grimm等)をも活用しながら、作業の見通しを得ることにした。

4. 研究成果

平成28年度の研究は西洋統治論に関する文献検索と教育(education)及び能力(faculty)に関連する語彙の用例について検討することであった。本研究の緒にあってルソー『エミール』第1編では教師(precepteur)と師傅(gouverneur = 統治者)が峻別され、むしろ導く者としての師傅 = 子どもの統治者論の性格が顕著であることは強調されて然るべきである。『エミール』もまた15世紀後半から簇生する「統治(govern)」とその類語を冠した統治論文献群の延長線上に位置づけられうるものである。John Lydgate『健康の統治』(1489)、『家族の統治』(1525頃ヴェネツィア)など、身体、家族、領民、子ども、そして君主や国を対象とする統治論文献が、17世紀末までに少なくとも217件が確認された。これら統治論文献の画期と目されるのが、トマス・エリオット『統治者論(The boke named the Gouvernour)』(1531)である。冒頭から公共善(publik weale)とは生きた身体(body lyuyng)であると述べられ、その実現は統治にかかっていると主張される。さらに同書第4章は「郷紳の子どもの教育(education or fourme of bringing up)」と題されており、子どもの授乳や乳母について語られたものである。子どもを健康に養育することこそが、まずは公益にかなうこととして議論されていた点は特徴的である。他方、管見の限りでは16世紀統治論のなかに能力(faculty)を引き出すことを教育と称し、統治の目標に据えるような顕著な議論は多くはない。ただしエラスムスの教育論とヴィヴェスの学問論のなかに子どもの本性(nature)を開発すべきかのような言辞を見出すことはできる。18世紀の能力開発論としての教育言説の登場を前に、どのような言説空間の転換が生じたのか、史料に即した詳細な検討が今後の課題となる。

本事業次年度以降も引き続き西欧における能力論関連文献について読解・分析をおこなった。これまであまり指摘されてこなかったが、フランス啓蒙思想の金字塔『百科全書』において、「能力(faculté)」に関する記事をルイ・ド・ジョクールが執筆している。当該記事によれば、「能力」は「力」であり、何事かをなす「可能性」と定義され、消化や睡眠といった身体機能、知覚、衝動、悟性、意志といった精神機能(fonctions)において敷衍されている。まさにニーチェが揶揄したように、「人はなぜ眠るのか 睡眠能力があるからである」といった能力論のトートロジーが開かれた典型である。ジョクールによれば、「能力とは諸器官(organes)を動かしその働きを指揮する第一原因(La premiere cause)である」とされ、物質である身体を機能させる根本原

因と捉えられている。つまり「能力」は諸機能を司る器官の体系としての有機体を説明するモデルであると同時に、有機体の諸活動をその根源において駆動している「原因」と見做されていたわけである。ジョークールの「能力」は機能的かつ実体的な概念であり、「能力」概念の両義的特徴をよく示している。諸能力に分割された人間本性を引き出し、統御しようとする教育統治論への展開の契機を見出すことができる。

こうした18世紀啓蒙思想に表れた能力言説は、さらに19世紀にかけて機能本位の生物学において全面展開していたことが分かった。その点に関して海外にて実地調査し、膨大な骨格標本などを閲覧し、比較解剖学の影響について検討することができた。ジョルジュ・キュヴィエに代表される機能本位の比較解剖学(器官形態学)は、器官の外形のもと「能力」を実体として表象する傾向が顕著である。特に身体機能を表象する骨格と精神機能を表象する脳は重要であり、フランス自然誌博物館の比較解剖学コレクションはよくそのことを伝えている。両者が結びつく頭蓋が人間の「能力」を読み解く鍵として重視されていたことは、本研究において実施された海外実地調査の有意義な成果の一つである。

事業最終年度、18世紀フランスにおける生物学と統治論の結節点にある議論としてエルヴェシウス(1715-1771)の著作を検討した。エルヴェシウスは啓蒙思想を代表する論客であり、ルソー『エミール』を厳しく批判したことで知られている。代表作『精神論』(1758)は禁書処分を受け、『百科全書』の刊行継続さえ危うくするという筆禍事件を引き起こしている。このようなラディカルな唯物論者であったエルヴェシウスはロック経験論を継承し、功利主義へと影響を及ぼした思想家としても知られ、能力言説が功利主義言説と接合する好例として重要である。エルヴェシウスの遺作として刊行された『人間論』(1771)は、統治論と能力論と教育論が結合した顕著な例であり、エルヴェシウス思想の集大成と言っても過言ではない。冒頭から「人間学は統治学の一部である」というテーゼが示され、教育学もその一環として位置づけられる。彼にとって教育は統治術にほかならなかったことになる。それはいかなる技術であるかといえ、エルヴェシウスは端的に「教育学は競争心をおこさせる手段についての学問」であり、人間精神と社会の進歩の原動力であると述べている。それゆえ『人間論』第一巻は教育論で占められ、教育学を新たな世俗的社会の統治術として打ち立てようとする顕著な志向に貫かれている。

『人間論』第二巻では、精神の差異が身体に因むのか、教育に因むのかが議論され、エルヴェシウスの人間本性論が開陳される。彼の人間本性論は極めてユニークなもので、人間本性論の系譜、すなわち精神の諸能力を名づけ、それを逐一列挙していくという従前の言説スタイルを踏襲せず、すべからく「精神は感覚能力(*la faculté de sentir*)の結果である」という感覚能力一元論とも言うべき大胆な立論から構成される。その際、鉄が燃素(フロギストン)の化合物であるように、動物もその有機体構造から感覚能力が生じているとする論拠が詳細に注記されており、能力を軸に生物学と教育学が結合する歴史を捉えようとする本研究にとって、極めて興味深い記述を見出すことができる。形而上学的生物論を棄却し、有機体論的生物観に立つエルヴェシウスは燃焼という一つの「能力」を実体化した架空の燃素メタファーによって感覚能力をも説明できると捉えていたことは、特筆すべき事実として強調されてよい。

最期に、本事業の目的の一つであった「education = 能力を引き出すこと」という俗説の由来について、明確な起源を特定するには至らなかった。とはいえ、イギリス最初の教育学教授ジョセフ・ペインの興味深いeducation語源説を見出すことはできた。ペインは堂々と次のように説明している。「educateの語源であるeducareはeducereと次の点で異なる。educereは一回性の行為として引き出すのに対して、educareは何度も繰り返し継続的に引き出す。さらにeducareは教育(educate)によって能力を引き出す(draw forth faculties)という意味になる」(『教育学講義』1871)。しかし同時期の『教育百科全書』には、セント・アンドリュース大学で古典学の教鞭を執るジェームズ・ドナルドソンによって次のように述べられている。「educationは元々乳母による子どもの養育・世話を意味するラテン語edūco(educare)に由来する。確かに引き出すという意味のedūco(educere)と語源的に結びつけられているが、ローマ人がeducatioを「引き出す(drawing out)」という観念と結びつけていたなどということは到底あり得ないことである」(『教育百科全書』1877)。教育言説が能力開発言説として定着しつつあった19世紀イギリスにおいて、ペインは荒唐無稽な眉唾ものの語源説を開陳してまで教育学の「起源」を時流に合わせていた。こうして現代まで続く、子どもの能力を引き出すことに自らの使命を見出す教育学の趨勢が決していったのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

平野 亮 「能力」と「脳力」 近代教育用語としての二つの「ノウリョク」 『兵庫教育大学紀要』第53巻、査読なし、2018年、9-20頁

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：平野 亮

ローマ字氏名：HIRANO Ryo

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。